

マーク・A・マトソン 『ヨハネによる福音書』

高 砂 民 宣・訳

Unit 3 ヨハネ 3 章 22 節～ 5 章 47 節 イエスに対する様々な反応

イエスとニコデモの対話の後、第四福音書記者は再び洗礼者ヨハネの証言に転じます。洗礼者ヨハネと彼の弟子たちとの短い会話は、ヨハネの伝道とイエスの伝道との関係について興味深い見通しを示すと共に、イエスがガリラヤへ戻る状況を準備します。帰還はイエスに対する数多くの異なる反応をもたらします。洗礼者ヨハネによるイエスについての第二の証言は、福音書の最初の部分 — イエスの最初の登場と弟子たちの召命 — を仕上げるのに役立っています。そしてより広範囲の伝道への移行、およびイエスの本質のさらに様々な啓示を可能にしています。

イエスによる授洗 (3 : 22～4 : 3)

第四福音書によると、イエスはヨハネと同じ時期にユダヤで洗礼を受けていました。共観福音書では、授洗が同時期になされていたことは報告されていません。しかし、ヨハネがイエスの伝道の初期のことを歴史の中の出来事として詳述していると考えても差しつかえないでしょう。イエスが幾人かの自分の弟子たちをヨハネの弟子たちの中から得て、似たような伝道を続けたということは十分にあり得ることです。

このよく似た授洗活動は、洗礼者ヨハネに従う者たちとイエスに従う者たち

との間に混乱を引き起こしたかもしれません。実際、第四福音書はそうした可能性を抱かせるのにやぶさかではありません。ファリサイ派の人々は、イエスの伝道を単にヨハネによる伝道の分派的なもの、おそらく伝道の競争相手くらいに考えているように見えます。そして彼らはヨハネに、両者の関係について説明してくれるよう求めています。しかしこの混乱は、ヨハネがイエスよりも下位の関係にあることを強調するもう一つの機会を与えています。洗礼者ヨハネは、(1)自分がメシアではないこと、そして(2)イエスの伝道が大きくなるために、自分自身の伝道は小さくならねばならないことを、再び証言しています。この二つの宣言は、1章24節から34節で洗礼者ヨハネが以前に語った言葉を想起させます。

ユダヤ地方でのヨハネの評判は、疑いも無く高いものでした。そして初代教会がイエスについての物語の中で洗礼者ヨハネの伝承をどのように詳述するかに関して、彼の評判は何らかの影響を及ぼしていたかもしれません。他の三つの福音書は、この洗礼者ヨハネの高い評判のゆえに、ヨハネがイエスに洗礼を授けたことと後にヘロデによって殺されたことを除いては、イエスに対するヨハネの関係について、ごく僅かしか語らなくなってしまったように思われます。第四福音書はイエスの伝道に対する洗礼者ヨハネの関係について、他の福音書よりも大きな関心を抱いていることから、両者の関係を解釈するための論評が必然的により詳細になっています。ヨハネはイエスが偉大な御方であることを二度証言するだけでなく、イエスもまた、そのような比較が引き起こすであろう論争を避けることを選び、ユダヤを去ってガリラヤへと向かいます(4:1~3)。さらに福音書記者は、イエスの言葉(5:33, 36)と物語の要約(10:40~42)の中で、ヨハネは真の証言者であったが、イエスのしるしと証しはより偉大で貴重なものであり、イエスのご自分の栄光の本質をより確実に顕していることを、読者に知らせています。

サマリアの女（4：4～42）

ユダヤを脱した後、イエスはサマリアの女と対話しますが、この物語はヨハネ福音書だけに収められている記事です。この記事はある意味で、イエスがユダヤ人以外の人と主体的に対応していることを示しており、それは古代ギリシア世界全体における福音の力を暗示しているのです。さらに、信じる者の人生においてイエスが果たしている命の与え手の役を探求するために、（イエスとサマリアの女の）会話は、ニコデモの時と同じように二重の意味を持つ言葉の綾に基づいて進められます。この会話は、キリスト論的にも福音的にも非常に重要であり、この後に生じる信仰者たちのための枠組みを作っているのです。

物語は、イエスがサマリアにあるヤコブの井戸で、一人残されているところから始まります。イエスはその井戸で、近くの町から来た女性と真昼間に会います。そしてイエスは彼女に、井戸から水を汲んでくれるように頼みます。いくぶん非難するような仕方でも、おそらくイエスがユダヤ人であることに對する輕蔑の表現方法として、そしてきっとユダヤ人とサマリア人との間に存在する宗教的および民族的反感に軽く触れながら、この女性はイエスがサマリア人に水を求めていることに対する驚きを表しています。この女性は井戸を管理（支配）しているように、この状況を支配（管理）しているように見えます。この女性がさらに驚いたことは（そしてそれは読者の驚きでもあります）、イエスがこの状況を一転させ、もしも彼女が彼は誰であることを認めるならば、彼女は彼に生きた水をくださいと頼むであろうと言っています。

イエスの最初の応答は、「生きた水」という用語の二重の意味を用いています。これは流れている水に用いられる語であり、その水は小川や泉から流れ、溜め池や井戸から汲む水よりも貴重な水と見なされていました。ユダヤ人の清めの浴槽（ミクバ）は、静止している水よりも動いている水であれば、より効果的であると考えられていました。この女性に対するイエスの反応は、生きた水（動いている水）のある泉をイエスは知っており、それはヤコブの井戸から汲み出される水よりも優れた水であることを暗示しています。これに対するサ

マリアの女の応答「私にその水をください」は、予期された答えです。しかしそれは、本当に重要な問題を正しく認識できずにいることを示しています。サマリアの女はこの語を普通の意味で理解しましたが、イエスは隠喩的に「命を与える」水に言及しているように思われます。そしてこれは本当のところ水ではなく、イエスご自身への信仰から出てくる、命を与えともいうべき本質を指しています。「生きた水」という語に対する誤解は、「上から／新しく 生まれる」という語に対するニコデモの無理解に相当します。

この女性がその水をくださいと求めることによって会話が脱線すると、イエスは会話の焦点をこの女性の現在の状況に移します。イエスがこの女性に夫を連れてきなさいと言うと、彼女は自分には夫がいないことを認めざるをえなくなります。イエスは彼女に5人の夫がいたが、現在一緒にいるのは夫ではないと述べることで、奇跡的な知識を示しています。これを象徴的に解することも出来ますが（例えば、ある人々はこの箇所をサマリア人の歴史についての言及と考えます）、物語の中では、この女性の生活状況についての預言者的な理解に過ぎないと思われます。そして彼女はイエスの言葉をそのように解釈しています。

この時点でサマリアの女性はイエスの言葉の預言者的な性質を認めますが、ユダヤ人／サマリア人の差別という背景の中でイエスを試そうとします。ユダヤ人とサマリア人との間の根深い反感ゆえに、この女性は自分の状況をイエスが特別に知っていたという「しるし」だけでイエスを受け入れることはできません。その代わり、この女性はサマリア人の礼拝習慣について挑発的な質問をしています。これはまるで彼女がイエスに、サマリア人の礼拝を、そして同様にサマリア人を、非難するものならしてみろと挑戦状を突き付けているかのようです。こうして、イエスがサマリア人を宗教的に間違った異端者として「無視する」ユダヤ人なのではないかという疑いが正しいことを、確認しようとしているかのようなのです。

イエスはサマリア人の礼拝習慣が間違っていると断言しますが、彼はこの言葉を、まずユダヤ人とサマリア人の礼拝習慣が一時的なものであり、「霊と真理をもって」礼拝することにより、取って代わられると語ることによって、語

ろうとしていることの文脈の中に位置づけています。この終わりの時の礼拝についての理解は、サマリア人とユダヤ人の立場を平等にし、二つのグループが完全に和解するように門戸を開放します。実際、イエスはサマリア人を、神が御心に留めるのに値し、来るべき礼拝において神に近づくことが出来る者たちとして受け入れています。よって、イエスはサマリア人とユダヤ人の相違を強調するよりもむしろ、「神の国」の新しい展望の中にサマリア人を含めるために手を差し出しているのです。

この女性は、「時が来る」というイエスの言葉を用いながら、明らかにこの予言をメシア的なものとして解釈しています。彼女の返事は、サマリア人もメシアの時代を待ち望んでおり、彼らにも神の意志を預言的に示すメシアへの期待があることを認めています。ここでこの女性は、サマリア人のタヘブへの期待を繰り返しました。タヘブとは、申命記18章18節に記されているモーセによって預言されたメシアのことです。ここでは単に、将来起こる可能性くらいに考えられているように思われます（「わたしは、メシアが来られることは知っています。…その方が来られるとき、…」）。しかしこの女性は、「時が来る。今がその時である」というイエスの力強い宣言が、現在の成就を意味していることを理解していないのです。女性とイエスとの間に理解の隔たりが残っています。

イエスはご自身の本質を大胆に啓示することによって、この会話を終わらせます。「それは、あなたと話をしているこの私である」。ギリシア語では、この文はキリストとしてのイエスの本質を明確に啓示してはいません。これを単純に言えば、「あなたと話しているのはこのわたしである」となるでしょう。長い対話の結びとしては妙な宣言と言えるかも知れません。しかしこの宣言において、イエスは初めて「わたしである（ギリシア語で、エゴー・エイミ）」という句を用いています。この句は本福音書の中で、後に幾つもの形に変化して繰り返して出てきます。「わたしは世の光である」、「わたしは天から降ってきたパンである」、「アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』』といったように、たいていはキリスト論が顕著な文脈の中に出てくるのです。さらに、この

用語がこの箇所より先に出てくるのは、洗礼者ヨハネが否定形で用いている所だけです。「わたしはキリストではない」(ヨハネ1:20、3:28)。これは自己顕現の一形式のようではありますが、いまだ曖昧さの下に隠されていて、誤った解釈のなされる可能性もあります。

しかし実際のところこの女性は、ご自身の本質についてのイエスの言明を間違っ

て解釈してはいません。おそらく預言者的な言葉と自己言明とを合わせる

ことによって、非常に力強いものとなっていたのでしょう。とにかくこの女性

は、彼女が出会った人のことについて話すため、イエスはメシアかもしれない

と告げるため、すぐに彼女の村へ戻ります。そのような結論は間違っている

という可能性を残すため、彼女は疑問文に工夫を凝らしています。NRSV (New

Revised Standard Version) は疑問文の中で、躊躇いを正確に捕らえています。

「彼がメシアであるはずは、ありませんよね?」。この女性は、一時的にイ

エスを信じたに過ぎません。しかし彼女の宣言によって、サマリアの人々はイ

エスに自分たちのところに留まるように頼みます。そして彼女の証言とは無関

係に、多くの人々がイエスのことを信じるようになるのです。イエスとサマリ

アの女性との会話は、多くのサマリア人がイエスは世の救い主であることを信

じるようになるという実を結びます。この文脈の中で、「世」という言葉は決

定的に重要です。なぜならば、神の計画はユダヤ教の狭い境界線を超えてサマ

リア人にも、さらには異邦人にも及ぶことを、イエスは示されたからです。

役人の息子の癒し (4: 43~54)

サマリア人とのやり取りの後、第四福音書は役人の息子の癒しについて物語

ります。この癒しの物語は、マタイとルカにもよく似た記事があります。この

物語は、ヨハネの物語の構造において多くの目的に役立っているように見え

ます。この物語はイエスの本性を表す「しるし」をもう一つ提供し、イエスの本

性の啓示に対する信仰の積極的な応答を見せてくれます。さらに、この物語は

構造上、この癒しとイエスの最初のしるしであるカナの婚礼の物語とを関係づ

けるので、イエスの行為に統一感を与えます。二つの重要な目印は、ヨハネの物語におけるこの構造的な連係を示しています。第一に、癒しの物語は最初のしるしであるカナの婚礼を振り返ることから始められています。カナはイエスが現在いる場所であると共に、イエスが以前、水を葡萄酒に変えるしるしを行った場所であるという、カナについての二つの明白な言及による振り返りによって、癒しの物語が始められているのです。第二に、癒しの出来事は、これはイエスがガリラヤに来てからなされた二回目のしるしであるという言葉によって締めくくられています。第四福音書記者はこの癒しを、特別な仕方で強調しようとしているように思われます。

しかし役人の息子の癒しについての第四福音書の記事、或いは信仰としるしについての第四福音書の見解をどう理解するかといったことと関連する諸問題について論じる前に、イエスがガリラヤへ戻られたことについての解釈について先ず論じなければなりません。ヨハネはその後に続く出来事の枠組みとなる前置きによって、断固として地理的な場所に注目します。しかしこの地理的な言及は、それ自体、興味深い難問を生み出しています。

ヨハネ福音書によると、イエスはサマリアを出発してガリラヤへ向かいます。それは、「預言者は自分の故郷では敬われない」(4:44) からでした。この説明には問題が沢山あります。イエスはサマリアで敬われなかったため、サマリアを発ったのでしょうか？これは最もあり得ない説明です。なぜならば、ヨハネがサマリアをイエスの故郷と理解したということは、ほとんど不可能だからです。さらに、物語はサマリアのこの村が、イエスを信じたと言っています。あるいは、この陳述はイエスがユダヤを出発したことの延長なのでしょうか（遡って4章3節を参照）？もしもそうであれば、ヨハネはイエスの故郷がユダヤであると暗示していることになります。この見解だと、イエスに対する反感はユダヤで生じ、ユダヤ、特にエルサレムで引き続き広がっていくという一般的なパターンと一致します。しかし第四福音書の他の箇所では、イエスは常にガリラヤと結び付けられています（1:45、6:42、7:41、7:52、18:5、18:7、19:19を見よ）。それゆえ、第四福音書記者がイエスはユダヤの出身で

あると主張しようとしたというのは、ありそうもないことです。しかし、イエスは数々の問題に出くわすためにガリラヤへ行かれたという考えは、物語に反しています。イエスは概してユダヤにおいてよりもガリラヤでもてなされたというだけでなく、まさにこの記事では、イエスはガリラヤに到着するや否や歓迎を受けた（4：45）というのですから。このことは預言者の言葉を無効にしています。

これは二つの可能性を残します。それは、イエスの「故郷」についての陳述は、出自よりも、むしろ霊的、或いは意図的な関係を意味しているか、またはアイロニー的なものを意味しているというものです。私は、どちらの解釈も正しいと思います。第四福音書は初めから終わりまでずっと、イエスがガリラヤの出身であることを認めています。しかしイエスは、「自分の民のところ」にも来ます。これはおそらくイスラエルの民のところへという意味であり、特にエルサレムと神殿に象徴的につながっています。他の福音書はそのような関心をエルサレムに対して抱いていません。そして直前の物語では、サマリアの女性との会話の中で、イエスはユダヤ人とエルサレム祭儀とを、現在の正しい礼拝の場所および救いの源であると言っています。移行の段落である4章43節から45節は、イエスがどこを「霊的な」故郷と考えているかを示す役割を担っています。そしてこの「本当の」故郷は皮肉なことにイエスを断固として拒絶します。それに対してイエスの実際の故郷であるガリラヤは、彼を喜んで受け入れます。そして彼のしるしはその地において信仰を生み出すのです。

この癒しの記事はまったく分かり易いものです。王の役人の息子がカファルナウムで死にかかっています。王の役人はイエスに癒してくださいよう頼みます。すげない拒絶とも、或いは励ましとも受け取れる言葉の後、役人は再びお願いします。するとイエスは、息子が生きる（病気が良くなる）ことを宣言します。その役人は家に帰り、息子の病気がよくなったことを知り、イエスを信じるようになるのです。この記事はルカとマタイの記事にとってもよく似ています。しかし共観福音書との重要な違いは、この男性が王の役人（おそらくヘロデ・アンティパスの宮廷の一員）であり、病気の人が彼の息子であることで

す。この男がヘロデの宮廷に仕える王の役人であったということは、彼がユダヤ人であったことを意味しているかもしれませんが（マタイとルカでは明らかに異邦人の百人隊長であるのとは対照的に）。他の重要な違いは、「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」（ヨハネ4：48）という、イエスの最初の返答です。

ヨハネの記事を理解するにあたって重要な問いは、王の役人へのイエスの言葉が、しるしに対する否定的評価を意味しているのか、それとも肯定的評価を意味しているのかということです。ヨハネ研究においては、王の役人へのイエスの陳述を否定的な陳述と見るのが一般的です。すなわち、癒してくださいと頼まれてイエスは困惑しました。なぜならば、このような仕方です。生じた信仰は、どういうわけか、しるしによる助け無しで生じる信仰よりも劣っているから、というのです。しかし私の意見では、そうした見解はこの点ではテキストの深読みとされます。イエスは単に、しるしと不思議な業は実のところ、信仰をもたらすのに役立つと言っているのです。それ故に、王の役人は最初にイエスの言葉を信じ、その後、彼の家族全員と一緒に信仰の表明をもって応えました。最後の応答は完全には明らかではありませんが、一役人と彼の家族はメシアであるイエスを信じた、とは明白に言われていない — これがその陳述の趣旨であり、この箇所全体が強調していることであるのは明白であるように思われます。イエスはしるしを行い、その人と彼の家族は信じるようになります。構造上、これはカナでの最初のしるしと並行しています。カナでイエスはしるしを行い、弟子たちは彼を信じました。これは二回目のしるしであるという語り手のコメントは、私たちの記憶を最初のしるしへと引き戻し、福音書記者が読者に、そうした並行について考えるよう望んでいることを、それとなく示しているのです。

一つの記事に根拠を置き過ぎるのは不適切かもしれませんが、王の役人の息子を癒す記事は、第四福音書記者がしるしは信仰へと導くという見解に否定的だったということを信じる根拠をほとんど提供していません。或いはまた、しるしを見て信じる信仰が、イエスの言葉を聞くだけで生じる信仰よりも劣って

いることを示すものもありません。しるしはイエスが栄光を顕される方法の一部なのです。仮にしるしが誤解された、或いは無視されたとしても、イエスは御自身を聴衆に説明することが必要であると知っているように思われます。しかし、しるしと証言は両方とも、イエスは誰であるか — つまり創造的な神の言であること — を知る方法として正当なものであると、第四福音書記者によって認められています。

安息日における癒し（5：1～18）

ヨハネ福音書においてパターンを形作りつつあることの一つとして、イエスは直ちにエルサレムへ戻ります。今回はただ「ユダヤ人の祭り」とあるだけで、どの祭りであるかは記されていません。福音書におけるヨハネの意図にとっては重要ではないかもしれませんが、時系列的に組み立てようとするならば、この祭りは晩春に祝う五旬祭（ペンテコステ）、すなわち七週祭と解釈できるかもしれません。エルサレムへの前回の旅は過越祭の時であり（2章）、この後の旅（7章）は秋の仮庵祭に行われています。五旬祭と過越祭、および仮庵祭は、ユダヤ教の三大祝祭です。そして聖書には、それらをエルサレムで祝う必要性について強調されています（申命記16：16を見よ。五旬祭の祝祭についてはレビ記23：15～22、民数記28：26～31、申命記16：9～12を見よ）。しかしヨハネ6章は、五旬祭前の早春である過越祭の近く（6：4）に位置付けられています。それゆえ、5章の名称が記されていない祝祭は仮庵祭かもしれません。或いはもしかすると、スローヤンが『現代聖書注解 ヨハネによる福音書』の中で書いているように、テキストの中で何らかの錯簡があったのかもしれません。或いはまた、著者は多くの記事を持っていて、それらを完全な出来事順に並べようとはしなかったのかもしれません。大切なことは、イエスがエルサレムに再びやって来たことであり、彼の旅は祝祭の時に行われる傾向があるということです。

第四福音書記者は再び奇跡のしるしを物語ります。今回は、羊の門の傍らに

ある池で、病気が治ることを求めている中風の人が癒される話です。イエスはその人に直りたいかと尋ねた後、床を担いで歩くように命じます。背景と事情はまったく異なりますが、ここでのイエスの命令は、共観福音書の伝承（マルコ2：11。マタイ9：6、ルカ5：24を参照せよ）にある中風の人の癒しとほぼ同じです。

しかしこの物語の焦点は、癒しそれ自体にあるのではなく、むしろその後が続く論争にあるのです。その癒しが行われたのは安息日であったため、「ユダヤ人たちは」イエスを安息日に働いた廉で非難しました。それに対してイエスは、「わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ」(5：17)と弁明しています。この返答は「ユダヤ人たちの」イエスに対する反感をさらに強め、彼らはイエスを殺そうとするようになりました。彼らが反感を抱く根拠は、ヨハネによれば次の3つに要約されます。

イエスは安息日を守らなかった。

イエスは神を自分の父と呼んだ。

したがって、イエスは自分を神と等しい者と見なした。

もちろんユダヤ人の反感を非理性的で偏狭なものと判断して退けるのは容易なことです。しかし安息日を守ることは、神から与えられた律法のもとでの義務であり、神の民の間では神の神聖さを守るために決定的なことなのです。安息日を守らないことは重大な罪です。しかし、一人のユダヤ人がその要求を拒否しようと企てるとすれば、さらに重大なことになるでしょう。神も働いておられるのだから安息日に働いても構わないと主張することにより、イエスは実のところ、ご自身と神との関係を理由に特別な免除を要求しているのです。となれば、イエスが自分を神と等しい者であると主張している、或いは、少なくとも自分を特別な子としての関係にあると主張していると「ユダヤ人たちが」判断したのはまったく正しいことです。

第四福音書記者はユダヤ人たちに、イエスについての正しい意見を幾つも述

べさせています。そして皮肉にも、正しい意見を述べることによって、ユダヤ人たちはイエスと真っ向から対立する立場に置かれるのです。この中で、ユダヤ人たちは自分たちの心の闇と共に神と対立する態度をも、うっかり露呈させてしまいます。ユダヤ人たちはイエスの言葉を聞いても正しい推論をしなかったというのではなく、むしろ、彼らはイエスの真の姿を認めなかったのです。このように、イエスに対する反感が広がって行くことは、プロローグにおいて既に述べられていますが（「彼は自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった」）、これは闇に基づいているのであって、無知によるものではありません。「ユダヤ人たち」の反感は、知識の欠如ではなく、光の欠如と神の子を受け入れようとしないう態度から生じているのです。

イエスについての証しの權威（5：19～47）

「ユダヤ人たち」の反感への応答において、イエスはモノローグ（独白）において自分自身を弁明します。イエスのモノローグに対する返答はなく、イエスのスピーチはユダヤ人の反対者たちとの実際の対話というよりも、文学的な工夫であると思われます。イエスに対する反感は募るばかりで、このスピーチに基づいてイエスを信じる者が現れたという報告は無いゆえに、物語の中の誰も納得したようには見えません。しかし同時に、イエスのモノローグに対して何も言い返す者がいなかったということは、反対者たちの非難に対するイエスの反論が、完全に申し分の無いものであったことを示しています。というのは、反対者たちは言葉を失っているからです。— 頭の中が真っ白というのではなかったにしても、実際に何も言葉が出てこなかったのです。

反対者たちへのイエスの返答は、三つの大胆な主張に基づいています。それらはイエスが自分自身を神の子と呼んだという非難を全面的に承認していることに基づいています。

1. 御子は御父から遣わされた。それ故に御子の業は御父の業と直接関係し

ており、その権威と力は神から受けたものである。

2. 御子は裁きを実行する権威を受けている。
3. イエスは誰であるかということについては十分な証言があり、その事実を認めないことは情報の不足ではなく、霊的な失敗である。

これらの命題の第一は、どうかするとイエスは神と無関係に、或いは神と対立しながら事を行っているかのような誤解から、イエスを守ることにいくぶん役立っています。ユダヤ人のイエスに対する非難 — イエスは自分を神と等しい者であると主張したという — の根底にあるのは、イエスがイスラエルの唯一の神とは無関係、或いは競合関係にあるという推測です。それで、イエスは自分が神に従属する者であることを主張することに腐心しています。しかし同時に、イエスは神によって任命された代理人として務めを果たしているとも言っています。神の業は確かにイエスの業を通して顕されているのです。この議論は「対等であるという主張」が引き起こし得る不愉快さを鈍らせ、非難を「ユダヤ人」の方へ向けるという主張にもなっています。もしもイエスが神の代理人の役をしているならば、イエスに対する反対は神に対する反対ということです。「子を敬わない者は、子をお遣わしになった父をも敬わない」(5:23)。

第二の命題は、おそらくさらにより大胆です。すなわち、御子は裁きの権能を与えられているということです。裁きは神の特権であり、裁きは父なる神によって御子に与えられている(5:22)という考えを、イエスは断言します。この裁きは命そのものを超えた力です。それにもかかわらず、イエスの裁きは決して神から切り離されてはおらず、ただひたすら神の意志を表すものなのです(5:30)。

イエスのモノローグの興味深い点は、現在の裁きと将来の裁きとが重なり合って存在していることです。裁く者としてのイエスの役目は、「人の子」としての彼の役目と関連して理解されています。他の福音書における類似した陳述と同じく、「人の子」という称号は、この世が終わり、最終的に裁きが行われるという将来の出来事としばしば関係しています。これはおそらく、マルコ

13章24節から27節に最も明瞭に見られます。イエスはその箇所、劇的な将来の展望を告知するために、イザヤ書34章からの預言とダニエル書7章からの叙述を結び付けています。偉大なドラマの結末は、人の子が選ばれた者たちに益するように裁きを行う権威を帯びて天から降ってくるのを見ることになります。同じ考えが、第四福音書におけるイエスの言葉でも繰り返されています。人の子として、イエスは裁きを行います。すべての人が墓の中から復活するのはだいふ先のことはあるにしても、その時、ある者たちは命を受け、ある者たちは罪の判決を受けるのです（ヨハネ5：27～29）。しかし同時に、第四福音書記者は裁きを今起こっている現実の出来事と理解しています。イエスを受け入れ、彼を父のもとから来た御方として敬う者は、既に好意的な裁きを受け、命を受けています（ヨハネ5：24、25）。裁きは終わりの時 — ギリシア語でエスカトン — に実際に起こる出来事です。裁きは直ちに現れることで、それゆえ既に起こっていると言うことが出来るのです。

第三の命題は、このスピーチの法的な性質に基づいています。イエスは自らを神に等しい者と見なしたゆえに冒瀆的であるという告発に対して、イエスは自分自身を弁護しています。裁判では普通、複数の証人を弁護のために召喚します。イエスはまさにそのとおり、ご自身の特質を支持してくれる三種類の証言を求めています。最初にイエスは、公正で預言的であるとされている洗礼者ヨハネの証しを想起させています。しかしそのような証しは、部分的なものでしかないといえます。そこでイエスは、二つ目の証を付け加えます。それは神がイエスに行うようにと与えられた業そのものです。古代において、しるしはしばしば証拠として用いられました。そしてこの場合、しるしはイエスに代わる神ご自身の証し（5：37）であると、イエスは言っています。特にイエスが行ったしるしは、イエスが神に代わって行われた証しなのです。そして最後にイエスは、古代の証言 — 聖書 — に寄り頼んでいます。そうすることで、イエスは実際のところモーセを、訴える者たちに対して証言する者として召喚しているのです。イスラエル人の間における神の業は、イエスのための基礎を置きました。それゆえ、イエスが古代の証言と一致して行動しているこ

とに気付かないのは、神の古代の証言を認めないことになるのです。イエスに對抗するためにモーセに助けを求めることで、「ユダヤ人たち」は実際には彼ら自身の霊的な闇を認めることになってしまったのです。

ニコデモとの対話の時と同様に、イエスは浴びせられた問いに対しても非難に対しても、ご自身の伝道を支える強力な後ろ盾をもって応答しています。イエスの伝道と業が広がるにつれて、彼は益々ユダヤ教の指導者たちから反感を持たれるようになります。「ユダヤ人たち」はイエスの主張に対し、沈黙をもって応答しますが、彼らは受け入れることも、信仰を告白することもしません。イエスに対する反対のドラマは始まったばかりです。

【?】 さらに深く考えるための問い

1. 私たちの社会におけるサマリア人とは、いったい誰でしょうか？あなたの教会は、「井戸で彼らに会う」ことを企てていますか？サマリアの女性に対するイエスの言葉は、様々な民族が同居する世界に生きている私たちに、何を語っていますか？

2. ヨハネ4章48節について話し合ってください。これはしるしに対する否定的な評価でしょうか、それとも肯定的な評価でしょうか？イエスは何を意味されたのでしょうか？

3. 「ユダヤ人たち」はなぜ、イエスを殺そうとしたのでしょうか（5：18）？彼らは正当化するために、どんな理由を持ち出したのでしょうか？

4. この学びの206～207頁に要約された、反対者たちへのイエスの応答の3点（ヨハネ5：19～47）を読んでください。ユダヤ人の指導者たちは、ここではイエスの主張に返答していません。しかしもしも彼らが返答したならば、彼らの返答はどのようなものであったと思いますか？

訳稿に関し、日本キリスト教団出版局の土肥研一氏から適切なお助言を頂いた。ここに感謝の意を表したい。